

JCR内分泌Forum in 沖縄



日時

2026年 1月29日（木） 18:50～20:00

会場

ダブルツリーbyヒルトン那覇首里城
2階広福の間

参加には事前登録が必要です（詳細は裏面をご確認ください）

ご講演終了後、情報交換会を予定しております

《情報提供》 18:50～19:00

グロウジェクト皮下注6mg・12mg専用注入器『グロウジェクターDuo』

《特別講演》 19:00～20:00

座長

中西 浩一 先生

琉球大学大学院医学研究科育成医学(小児科)講座 教授

『成長ホルモン分泌不全の成因と その治療について』

演者

田島 敏広 先生

自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児科 教授

【講演抄録】

『成長ホルモン分泌不全の成因とその治療について』

成長ホルモン(growth hormone, GH)治療は1975年にヒト下垂体抽出GHにより開始された。その後初めての遺伝子組み換え技術によるメチオニルヒトGH製剤が1985年に、1988年には遺伝子組み換え技術による天然型ヒトGH製剤が利用可能となった。GH治療の当初から、約30年を経て、長時間作用型GH製剤の選択肢が加わった。小児のGHDには長時間作用型GH製剤として、somatrogenとsomapacitanが使用できるが、いずれもdaily製剤に対して短期間の身長予後については、非劣性であることが示されている。しかし長期間の成人身長への効果、リアルワールドデータに関してはいまだ十分ではない。長時間作用型GH製剤は週1回投与が基本であるため、アドヒアランス向上が期待される。一方daily製剤に比較して、長時間作用型GH製剤では今後の検討が必要ないいくつかの課題もある。¹⁾

ヒト先天性複合型下垂体ホルモン分泌不全は小児科がまれに遭遇する疾患であり、GH分泌不全、ACTH分泌不全を伴い、出生後早期より重篤な症状を示す場合もある。そのため、早期の診断、適切なホルモン補充が必要である。その一部は様々な遺伝子の異常によって発症する。ヒトiPS細胞より、下垂体を再生し、ACTH産生細胞が分化できることが報告された。また先天性複合型下垂体ホルモン分泌不全患者からのiPS細胞を利用し、病態解明をおこなうことも行われている。²⁾

今回我々が取り組んでいる研究も含めて先天性複合型下垂体ホルモン分泌不全の最近の知見について概説する。

1) 低身長児に対する成長ホルモン治療の進歩について

Dokkyo Journal of Medical Sciences 50(2) : 111~122, 2023

2) Generation and purification of ACTH-secreting hPSC-derived pituitary cells for effective transplantation

Stem Cell Reports. 2023 Aug 8;18(8):1657-1671. doi: 10.1016/j.stemcr.2023.05.002. Epub 2023 Jun 8.

1月21日(水)までにご登録ください

事前参加登録フォーム

<https://forms.office.com/r/wJZnTV1TG9>

登録フォームへアクセスし、必要事項をご入力の上、送信ボタンをクリックしてください。

1月22日(木)以降に会場参加登録をご希望される場合はJCRファーマ(株) 沢田までご連絡ください。

(e-mail : sawada-k@jp.jcrpharm.com TEL : 080-8302-7475)

